

図5. ホザキノフサモの葉の形態Ⅱ. ●: 水中葉、○: ABAにより誘導された葉

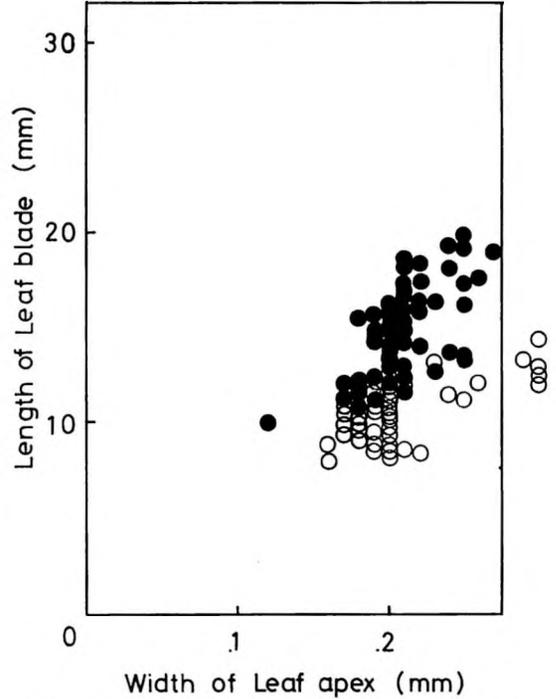


図6. ホザキノフサモの葉の形態Ⅲ. ●: 水中葉、○: 気孔の見いだされた葉

ホザキノフサモに見られる気孔は、葉身の短いものに多く観察され長いものにはほとんど見いだすことが出来なかった(図2・図3)。葉のB/A比を計算しグラフを書くと、ふたつのグループに分離することが分かる(図4)。グラフで55-60にピークを持つものは気中葉タイプの葉、75-80にピークを持つものが水中葉タイプの葉である。さらに、縦軸にB、横軸にAをとってグラフを書くと、これは別に報告したABA処理により誘導された葉と水中葉のグラフに対応している(図5・図6)。また、野外でも茎が1 cmほど立って気中葉をつけているものも観察できた。さらに、水槽に田の土を入れ、土の表面をいつもぬらした状態でホザキノフサモを寝かせて

おく、未発達ではあるが、1 cmほど茎が立って頂芽が伸び、気孔を持つ気中葉をつけているものが展開した。

ホザキノフサモは花期においては花梗を水上に出し花穂をつける。かつてホザキノフサモはフサモと同様に気中葉が発達した形態をしていたであろう。そして、それが水中に適応するうちに気中葉が退化し、水中葉が発達するようになったものと考えられる。生態での気中葉の形成の事実はそのなごりと考えられないだろうか。

文 献

青木雅夫. (1985) 水生植物フサモ属の異形葉の発現機構とその生態的意義 水草研究会報(21): 4-7.

○清水正元著『澄んだ湖をつくる 阿蘇山麓からの提言』(朝日選書、236頁、940円、1984年12月)

熊本の水前寺・江津湖といえば阿蘇山麓に源を発する豊富な湧水に恵まれ、ヒラモの特産などで水草研究者にも知られた水系である。しかし、明治以降の地域開発とともに、大きな変ぼうをとげてきた。その様子を刻明に

たどり、これらの水系の再生のためには何をなすべきか、その提言をまとめたのが本書である。かつての湧水植物群から、近年の帰化水草の大繁茂まで、その変遷が詳しく紹介されていて参考になる。(角野康郎)